地域の自然に対する体系的思想構造の比較手法

南　優次

Comparative Method of Systematic Structure of Literary Thought toward the Local Nature

Yuji MINAMI

Abstract : This report is designed to suggest the process of theorizing the comparative method of systematic structure of literary thought toward the local nature. Through analyzing the cultural background of "Endymion" written by John Keats, dicotamical way of thinking happens to be able to be applied to the comparative analysis. Especially, "Urbanization" and "Environment" used as literary terms make clear differences from ordinary usages which can be explained through the analysis of industrialization in England.

0　緒言

修士論文作成後、ノースロップ・フライの文学理論を軸に、文学の体系的思想構造の研究を持続してきた。その研究の過程で、「地域の自然に対する体系的思想構造」を比較することが可能だということがわかってきた。この比較分析手法を完成させるためには、日欧の文化に対する、更なる複眼的視座を養い、文化に関する議論を重ねる必要があると考える。

1　体系的思想構造の比較手法

フライの理論に従うと、ロマン派以前の思想構造では、都市を建設する目的は、「人間的自然」の意識的確立、法律、道徳、宗教などの社会的規律を整備することによって、失われた場所を奪還する行為であると、規定されている。この思想構造は、現在でも、修道院文化を理解する場合には、有効だと考えられる。

一方、現代日本では、森林混在を前提とする都市再生構想が提案されている。川勝平太氏の、「ガーデンアイランズ構想」や、1990年頃に成熟したと言われる、中尾佐助氏の「照葉樹林文化論」に基づく、国土改造計画、あるいは、新日鉄大分の植栽を手がけた宮脇昭氏の、「ふるさとの木によるふるさとの森作り」などが提案されている。　それぞれ、イギリス、中国、ドイツを研究対象とした結果を応用した理論構築となっている。また、その理論を支える技術も既に開発されていると考える。

この構想は、西洋のロマン派以降の体系的思想構造である、「自然的自然」を重視する、人間の自意識から解放された社会を実現する都市再生構想からそう遠い思想構造でできているわけではない。

ただ、日常生活においては、上記の文学用語である、『「自然的自然」を重視する、人間の自意識から解放された社会を実現する都市再生構想』という表現を使うかわりに、単純に、「環境保護」という表現を使って、議論を構成している。

この日常用語は、使用に際し、「イギリスの産業革命から始まる、地球規模の経済活動の結果、環境破壊技術の地球規模の拡散が生じ、皮肉なことに、人類の生存を維持するのに必要な生産活動を阻害するレベルの地球温暖化現象を招いてしまった」、という認識が必要になる。

この議論は、2項対立的思考方法を応用すれば、環境破壊技術と、環境保護技術という対立軸が、立論2項軸となる。その上で、吉岡昭彦氏によるイギリス帝国主義下での植民地統治とその経済史研究を背景に、今世紀の人類の経済活動のあり方を考察する必要がある。

まとめると、日常用語での「環境保護」と「環境破壊」という2項対立的思考様式は、「環境保護技術」と「環境破壊技術」という2項対立的思考様式を軸として、経済活動として議論を積み重ねる必要がある。

それに対して、文学用語では、「自然的自然」と「人間的自然」という2項対立的思考様式を立論の軸とし、前者は、人間が構成する社会において、「無意識」の解放を可能とする方向性を持つが、後者の「人間的自然」は、「意識の壁」を張り巡らすことになるという認識を、議論の前提とする必要がある。

この文学用語の議論を重ねる場合、「修道院」の存在は、考察の対象として成立する。

(2006年 11月 24日受理)

*宇部工業高等専門学校一般科英語教室

2　体系的思想構造の分析過程

地域の自然に対する体系的思想構造のモデルを散文化して、単純な比較分析を可能にする予定である。

（1）　現在でも実施されている、修道院での聖務日課を支える、体系的思想構造について、報告を行う。その際、九州イギリス・ロマン派文学研究会で発表した、「人間の神性に関する一考察（1）、（2）」をまとめる。

（2）　アレクサンダー・ポープの「Windsor Forest」、ジョージ・クラッブの「The Village」、シャーロット・スミスの「Beachy Head」、ジョン・キーツの「Endymion」に出てくる植物に焦点を当てて、徐々に植物が、イギリスの詩人の視野の中に入ってくる過程をたどる。その過程を、「フライ理論に基づく、自然的自然に関する一考察」という題でまとめて、発表ないし論文化を試みる。特に、スミスの「Beachy Head」の 10 行目に出てくる、「and from the continent Eternally divided this green isle.」に注目し、ワイト島の象徴的な意味を考察する予定である。

18 世紀の詩人の中でも、ポープとクラッブを取り上げる理由は、A・S・コリンズの指摘に寄っている。彼によると、ポープ、クラッブ、チャタトンは、当時存在していたパトロン制や、版権を主張しだした出版業者の意図によらず、独立した文人という人格で、著述活動をしていたそうである。

また一方、シャーロット・スミスは、前ロマン派に属する、群小詩人の一人に分類されているが、1806 年のこの作品で、守るべき価値のある国イギリスのイメージを明確にし、ワーズワースやキーツに影響を与えたと言われている。大陸のウィーンでは、1803 年頃、ベートーベンが第 3 交響曲「英雄」を作曲し、王制打倒、民主主義確立の理念の実現の期待を表現している。ヨーロッパ大陸と、イギリスの思想比較が可能だと思われる。

（3）　ジョナサン・ベイト著「ロマン派のエコロジー」（2000 年訳書発刊）を取り上げ、自然的自然のイギリスでの展開について考察する。特に、エコロジーの語源に関する考察から始まる、ベイト氏の自然観（p. 166）を中心に、自然的自然の議論を深める予定である。

更に、上記（1）（2）（3）の議論を踏まえた上で、日本の自然的自然に関する思想構造を提示している、代表的な都市再生構想を取り上げ、比較考察する予定である。

現時点での予定書誌一覧は、以下の通りである。

1　修道院　（今野國雄著　岩波新書　1981 年初版）
2　中世音楽の精神史　（金澤正剛著　講談社選書　1998 年初版）
3　中世社会の音楽　（アルバート・スィー著　村井範子訳　東海大学出版会　1978 年版）
4　ベネディクトゥスの『戒律』とアレイオス主義　（「聖ベネディクトゥス修道院文化」所収　古田　暁著　創文社　1998 年初版）
5　『政治家必携の書―聖書』とその背景　（『政治家必携の書―聖書』研究　所収　こびあん書房　1998 年初版）
6　イギリス宗教史　（浜林　政夫　大月書店　1998 年版　1987 年初版）
7　天球の音楽　（ジェイミー・ジェイムズ著　黒川孝文訳　白揚社　1998 年版）
8　花開く宮廷音楽　（イアン・フェンロン編　今谷和憲訳　音楽の友社　1997 年版）
9　ドイツ音楽の興隆　（ジョージ・J・ビューロー編　関根　敏子監訳　1996 年版）
10　バッハ＝魂のエヴァンエリスト　（磯山　雅著　東京書籍　1990 年版　1985 年初版）
11　パレストリーナ　その生涯　（リーノ・ビヤンキ著　松本康子訳　カワイ出版　1999 年）
12　１８世紀イギリス出版文化史　（A・S・コリンズ著　青木健・榎本洋訳　彩流社　1994 年初版）
13　ピュタゴラス派　（B・チェントローネ著　斎藤憲訳　岩波書店　2000 年初版）
14　ピュタゴラス伝　（イアンブリコス著　佐藤義尚訳　国文社　2000 年初版）
15　TheVillage Book 1　（George Crabbe 著　The Oxford Book of Eighteenth Century Verse）
16　Beachy Head（Charlotte Smith 著　British Women Poets of the Romantic Era: an Anthology）
17　The Eighteenth-Century Background　（Basil Willey 著 Penguin Books Ltd. 1962 年）
18　Poetry and music in seventeenth-century England（Diane Kelsey McColley 著 Cambridge University Press 1997 年）
19　ロマン派のエコロジー　（ジョナサン・ベイト著　小田友弥・石幡直樹訳　松柏社　2000 年）
20　栽培植物と農耕の起源　（中尾佐助著　岩波書店　1966 年初版）
21　照葉樹林文化の道　（佐々木高明著　NHK ブックス　1982 年初版）
22　花と木の文化史　（中尾佐助著　岩波書店　1986 年）
23　照葉樹林文化論の現代的展開　（金子務・山口裕文編著　北海道大学図書刊行会　2001 年）
24　鎮守の森　（宮脇昭著　新潮社　2000 年）

3－1　体系的思想構造例　－　フライの理論

フライ氏は、文学の源泉として、体系的思想構造があり、それが神話という形態を取ってアレゴリーとして表現されたものが、文学であるという見解を示す。

彼によると、ロマン派以前の神話構造は、空間的に上下の関係で捉えられる、４つの水準で成り立っている。

神の所在であり、類比でしか表現できない天[第一水準]、人間が元々住みたかった所としての、人間的自然（ブレークの言う無垢の世界）[第二水準]、アダムの堕落後の人間の環境として作られた所としての自然的自然（ブレークの言う経験の世界）[第三水準]、最下位に地獄[第四水準]がある。

この構造を思想の原型として持つ人間が、アレゴリーとしてイメージするのは、上昇の概念である。即ち、天体の規則正しい運行が、神の意志であるから、人間が、上位の人間的自然[第二水準]に復帰するためには、自然的自然[第三水準]の中で都市を建設し、道徳、宗教、法律を完備することによって、神の意志に近づけばよい。この場合、人間的自然[第二水準]と自然的自然[第三水準]は、道徳を媒介として循環する。そして天と地は、完全に分離している。この上昇の概念にある社会のイメージは、以下のように表現されている。

『キリスト教では、人間が真に帰属するところを奪還するには、人間は、自然に対して意識の壁を張り巡らし、エロスやディオニュソスを超えなければならない。そして自分を抑制し、社会的存在としての自覚を持たねばならない。自然の要求のままに振舞ってはいけないのだ。』

（フライ著『イギリス・ロマン主義の神話』より）

このロマン派以前の神話構造に対して、ロマン派の神話構造は、上下関係ではなく、内と外の関係として捉えられると、フライ氏は言う。これは、地動説や万有引力の法則が確認されたことによって、人間は、天[第一水準]に、神の意志よりも無意識に動く自動機械をイメージするようになった。その連想として、上昇志向は有効性を失い、ロマン派にとって、人間的自然[第二水準]は、過去の人間の自意識の結果に過ぎないと考えられた。このロマン派の、内と外の関係は、以下のように表現されている。

『ロマン主義になって、魂の旅の最終的到達方向は、下へ、内へ、人間と自然の調和の隠れた基盤へ、と向かうことになった。・・・ミルトンの夢幻的な照明のある地獄の万魔殿の様に、魂の神秘的な奥深い所は、内的啓蒙の場所であると同時に、大きな悪の場所にも成り得る所である。』

（フライ著『イギリス・ロマン主義の神話』より）

以上の枠組みを基盤として、フライ氏のエンディミオン論は展開される。

フライ氏は、この物語が、ロマン派以前の神話構造にある、人間的自然[第二水準]から始まっていることを指摘する。即ち、ブレイクの言う無垢の世界に、若き牧人王エンディミオンは、違和感なく帰属している筈である。

ところが、エンディミオンは、夢の中で垣間見た理想美を信じて、それとの合一を目指して、旅に出る。この合一の夢の実現は、第２巻の地下への、第３巻の海への旅を導く。この旅は、裏と表の関係にある、理想的、悪魔的状態に、容易に変わる可能性を持っていた。この裏になるか表になるかの鍵を握るのが、合一の概念である。即ち、旅(内省）の結果、自我との合一に堕ちた場合悪魔的となり、自然との合一を果たした時には、理想的となるのである。

このフライ氏の神話構造論に従って解釈すると、"habitual self"(常住の自我)は、理想美が見えなくなって、「主観の牢獄に閉じ込められた、自我との合一状態にある、悪魔的な」状態を指すものと解釈できる。

また、「到達すべき理想の自己」は、"self"では表現しきれず、むしろ"soul"で表現するべき内容である事が指摘できる。藤田氏は次のように指摘する。

『Endymion において、'how crude and sore/The journey homeward to habitual self' といい、Ode to a Nightingale において、'forlorn' という言葉によって呼び戻される'my sole self' がそれである。Keats における自我は、有限なる 'self' と、永遠なる'soul' との相克にある。両者の和解と調和、有限なる存在としての自己と、永遠なるものとの一体化を求めての苦しい闘いが、Keats の主題であった。』

（藤田真治著『自我と想像力』より）

この感情を基盤とする議論は、フランス革命が恐怖政治に終わった事に対する、ワーズワースの内省に、その萌芽をみる。バジル・ウィリーの研究によると、ワーズワースは、最初は、理性偏重主義者で、必然を唱えるウィリアム・ゴッドウィンの道徳因を基盤とする完全性(Perfectibility)に従い、革命の精神的原動力である、「人間は、自然の成長点であり、人間ほどはっきりと、自然の産み出しつつあるという姿を、示しえるものは他にない」という概念を受容していた。がその後、ワーズワースは気持ちを変化させる。

『人間の本性によると、現状の根本的な変革と剥き出しの理性の崇拝は、約束の地よりも荒地へと導き易いということを、確信してしまってからは、彼にとって無限に好ましく思われたのは、作られるであろう物(natura naturans)よりも、あるがままのもの(natura naturata)、理性よりも感情、思考よりも直感の生活、哲学者よりも子供や農夫、賢者一同よりも春の森の一つの衝動、仏蘭西よりも英国、英国の他のどの場所よりも湖畔地域であった。』

（文献リスト１７　参照）

以上の考察により、イギリスの湖畔地域と、エンディミオ

ンの旅が、ロマン派以降の体系的思想構造を包含していることを指摘したものとする。

3－2　体系的思想構造例　－　三位一体説

モノフォニーの歴史記述に従って、まず詩篇唱定式で歌われる「Laudate pueri」があり、次に、当時のドリア調という音階が、「君が代」にあることを、知る。そして最後に、定式を破り、リズムに重点を置いた、アンブロシウス賛歌の、「Aeterne rerum Conditor」を聞く。いずれも縦笛で吹ける曲である。

このアンブロシウス賛歌の意図したものが、聖歌の一つの性質を形成している。　それは、異端なものに対する音楽的武器という性質である。4 世紀に、異端と正統の両派が賛歌を作っていた。アンブロシウス賛歌は、正統派賛歌の成功例である。

古田論文によると、アレイオス主義とアタナシウス主義という、三位一体論に関する正統・異端論争の混乱は、例えば、栄唱の表現の変化に見て取れると指摘する。つまり、「Gloria Patri per Filium in Spiritu Sancto」と、「Gloria patri et Filio et Spiritui Sancto」という、per—in 形式と、et—et 形式が混在していたのに、アレイオス主義者が、per—in 形式を、キリストが神ではないことを示すものと解釈したため、次第に使われなくなり、et—et 形式に落ち着いていったことがわかるという。

この三位一体説を否定する立場は、イギリスでは、17 世紀にジョン・ビドル、トマス・ファーミンらによって唱えられた。彼らは、ユニテリアンと称していた。コールリッヂは、ユニテリアンであったが、1806 年ごろその思想を批判し、三位一体論に親しみ始めているという指摘が、原氏によってなされている。

イギリス国教会は、1563 年に「39 か条」(Thirty-Nine Articles) を定めている。現在のイギリス国教会の公式教義である。その第 1 条に、三位一体説は確認されている。
この三位一体説を哲学的に正当化する努力が、中世を通じて行われた。その際、ギリシャ・ローマの哲学が受容されている。また、思弁的音楽の受容も指摘できる。つまり、ピュタゴラス学派は、数と音楽と宇宙は同じものであると考えた。その発想の起源は、音程を秩序付ける比率の存在である。これは、宇宙の真理を解き明かす鍵として認識される。この発想に基づいて作られた音楽理論の教科書であるボエティウスの『音楽綱要』(De institutione musica) は、1856 年まで、オクスフォード大学で音楽理論の講義で教科書として使われていたと、ジェイミー・ジェイムズは驚嘆している。
最後に、イギリス国教会の特殊性を指摘したい。が、今回は、ただ国教会が成立する以前、イギリスでは、ソールズベリー聖歌が 11 世紀以降、独自に発展したことだけを指摘しておく。

3－3　体系的思想構造例　－　バッハ

対位技法の歴史的展開を概観すると、9 世紀以降の教会唱法、15, 6 世紀の、ジョスカン・デ・プレや、パレストリーナを代表とする多声音楽を経て，終着点である大バッハ、J・S・バッハに至る。(芥川　也寸志著『音楽の基礎』より)
ルターの革命的な宗教改革に対して，カトリック教会では、1545 年から 1563 年まで、トリエント公会議を開いて，音楽を含めた、カトリック教会に関する全ての事項（信仰公理、聖職者及び世俗者組織、典礼）が議論された。

教皇グレゴリウス 13 世は、1577 年 10 月 25 日付けで、グレゴリオ聖歌改正の小勅書をパレストリーナとアンニーバレ・ゾイロに送っている。改正の動機は，『神のお住まいになる家は，真に祈りの場と思われねばならぬ』という認識にある。　パレストリーナの作品の大半は、グレゴリオ聖歌のモチーフ上に構成されている。(文献リスト１１　参照)

このカトリックの、反宗教改革的性格をも持つグレゴリオ聖歌改革に対し、聖書中心主義を標榜するプロテスタント、特にルター派の音楽は、自国語で、会衆とともに歌うコラール（賛美歌）が発展の道をたどることになる。この時期、ローマの教皇権力の及ばない、ルター派の首都として、ライプツイッヒが未曾有の成長と繁栄を遂げる。1753 年、バッハの死（1750 年）の 3 年後、ライプツイッヒの人口は、18 世紀最大の 3 万 2,384 人に達する。バッハは、ライプツイッヒの書籍市で、最新の音楽出版物を買うことができた。(ジョージ・B・ストーファー著　『ライプツイッヒ：世界人の貿易センター』より)

ここでは、ジェームズ・トムソンの啓蒙主義的な詩『四季』の翻訳であるバルトルド・ハインリヒ・ブロッケスの『調和する天上の愉楽』(ハンブルク、1744) なども入手できたそうである。

バッハは、1722 年『平均率クラヴィーア曲集　第一巻』を完成させた。以下引用。

『ハ長調、ハ短調から始めて、ロ長調、ロ短調に至る曲集を完成したとき、バッハは、キリスト者としての心の満足をも味わったにちがいない。なぜならば、宇宙の秩序が今や余すところ無く音楽に移され、作曲を通じて、神の創造の模倣が完成したからである。『平均率は音楽の旧約聖書であるというハンス・フォン・ビューローの有名な譬えは、以上のことと関連付けて解釈し直してみるとき、新たな説得力を帯びてくる。『平均率』は、神の秩序の似姿としてのミクロコスモスの提示というドイツ・バロックの音楽理念の、最も典型的な具体化の一つでもあるのである。』

(文献リスト１０参照)

特筆すべきことは、天上の音楽の概念が、バッハのオルガン曲において、耳に訴える概念となったことである。理論と、具体的作品の融合、合体の成功した例として、記憶にとどめ

ておくべきであると考える。

4　思想構造の比較散文化

西欧の自然環境保護運動の歴史の中に、ロマン派以後の人間の関心が、自然的自然に重心移動したことも含まれるはずである。その歴史と、日本の自然観照の態度を比較検討することができる。この比較を行う場合、体系的思想構造を散文化することが、理解を深めることになる。以下、その散文化の一例を示す。

『幼苗植栽手法と、ビオトープによる生態系復元活動という、どちらもドイツ由来の技術が、20世紀後半、日本の勤勉な学者によって引き継がれ、完成された。21世紀前半は、彼らの後継者の指導の下に、急速にアジア全域の生態系復元活動が展開され、どの地域も、その本来の植生を取り戻すものと期待される。

この生態系復元活動の展開を通じて、特に日本の場合、奈良朝から続く花卉園芸文化もまた、その文化の対象を日常生活の中に見出すようになると想像される。言い換えると、東洋花卉園芸文化の第一次センターであった中国の模倣から、江戸時代には第2次センターとして成熟するに至った、花の美しさを愛でる習俗が、その復活の機会を与えられることになる。このことはまた、人間の活動によって、和歌や俳句の自然詠のための安定した基盤的環境が永続的に提供できるようになることを意味する。また更に期待できるのは、日本原産植物を愛でた作品が多い万葉集の中に見られる植生もが、日常の自然景に現前することである。

上記の人間の活動を支えるのは、自然保護技術である。その意味では、現在特別な自然保護技術を必要とせず、月明かりと灯明で静かな夜を過ごし、春や秋を吉野の山の桜やもみじで知り、大和三山を額田大王の歌でめでることの出来る、奈良の地は、現在日本で一番自殺者の少ない土地であることも含めて、イギリスの湖畔地域と同様に、自然に対する体系的思想構造を追及するのにふさわしい地域であることが指摘できる。その第一歩として、この地のどんな美に感動して、都を造成するに至ったのか、その渡来人の思いが由来する自然を、散文の中に再構成する必要がある。これは、ザルツブルグ同様、奈良の地が、観光立地となる条件を提供する。これは、日本の他のどの地域にも求めることのできない、ある思想の表現となりえる。また、当然のことではあるが、この地に意味の無い環境破壊技術が適用されない事が、体系的思想構造を形成するためには重要である。』

宇部高専の周囲を見渡すと、夾竹桃、杉、松、イチョウの大木で、森の中に学校が存在するような錯覚を覚える。また、建物の敷地の周囲も緑地帯が、不完全ながら、設置されている。また、山桃、山法師、南天、山茶花の植栽もあり、その価値を再認識し、豊かな森を形成する潜在力が常に敷地内に存在することを、宇部の古老や、学生たちと語りつづけることが、教育上大事なことだと考える。その意味では、宇部で言えば、「かたばみ」を校章とする高校が存在する。古来日本人に愛された、路傍で育つ雑草である。家紋としても利用され、子孫繁栄の意味を持つ。大事なことは、新日鉄大分の植栽を手がけた、宮脇昭氏は、「雑草学」を学問の出発点としている事である。現在ではグランドカバーとしての価値も語られるかたばみを校章として持つ高校から、いずれ、宮脇氏のような人物が出てくるかもしれないという思いが湧いてくる。

一言で言うと、生態系復元活動という、人間の活動が、我々のある特定の文化を支えるよすがとなるということである。この議論を、体系的思想構造にまで成熟させる努力をする予定である。

5　今後の展開

再確認であるが、J.S.バッハが、1722年『平均率クラヴィーア曲集　第一巻』を完成させ、天上の音楽の概念を、地上の音楽によって表現出来たという磯山氏の指摘があることを、３－３で強調した。

磯山氏によると、バッハは、世俗音楽を宗教音楽に活用する、民衆とともに歩むルター正統派神学を受けて、音楽を創造し続けたと指摘する。この磯山氏の研究成果は、ブルーメが1962年のバッハ祭における講演「新しいバッハ像の輪郭」で、バッハを教会音楽家として過度に聖化せずに、一介の市民音楽家としてとらえ直すべきだ、と主張した事に対し、疑問を呈した事から成就している。

この民衆とともに歩むという姿勢を、プロティスタンティズムの原点と考えると、キーツがロマンスから現実へと視点を移動させたことについて、宗教と関係があるのか、無いのかという議論に対し、理解が深まるのではないかと思う。既に、エンディミオンの幸福論については、出口保夫氏が、キリスト教的宗教観に深く根ざしていることを明言されている。以下引用。

『エンディミオンの美の探究は、ここにおいて神の座に至る精神の高揚と同一であって、・・・先に述べた正統的キリスト教思想は、いっそう明白に認識する事ができる。』
「彼自身がすでに神の認識の根源を、「光」そのものと同一視していたのであって、それは、既に幼年期から得ていたと思われる聖書的表象以外のものではない。」
（出口　保夫著『キーツとその時代(上)』1997年刊　より）

この議論を深めるために必要な事の１つとして、文学と音楽学において、パロディ技法の定義が違うということを指摘した。文学におけるパロディの典型的な例としては、「救世主を標榜するキリストに茨の王冠をかぶせ、光(神の栄光)ではなく、死の十字架を背負って、神の座ではなく、ゴルゴダ

の丘にある処刑台に赴く」姿を描く事となる。

それに対し、音楽学では、「既にある曲に新たな歌詞を付して、別のコンテクストに転用する事」ということである。バッハの場合であれば、世俗曲の宗教曲への改作のことを、「世俗曲のパロディ」と表現することになる。

また、磯山氏の指摘では、バッハの場合、宗教曲から、世俗曲へのパロディは発見されていないそうである。（磯山雅著『バッハの宗教音楽の諸相』より）

以上の考察を踏まえて、「brain-sick shepherd prince」（脳病病みの羊飼いの王子）と自らを比喩するエンディミオンのパロディが持つ意味を、今後解明していく予定である。